

## 大学新入生の英語教育に対する期待度を探る

関 妙子 (早稲田大学)

### 1. はじめに

新世紀に入り、英語を取り巻く状況は今までも増して急激な変化を呈している。主なものとして、1) 英語の公用語化の提言、2) 2002年小学校での英語教育開始、3) 外国企業との吸収・合併に伴う企業の国際化、及び新規雇用への対応の変化、4) コンピューターの普及に伴う英語情報の急増、などが挙げられる。それぞれ詳細をみると、1) は2001年1月、首相の私的諮問機関「21世紀日本の構想」懇談会の最終報告に盛り込まれたもので、日本において、明治初期の猛烈な欧米化以後ほぼ1世紀を経て、英語の公用語化が再び公に提言されたという点で注目される。また、2) については、2002年度から小学校で、新たに「生きる力」(Zest for Living)を教えることを目標として「総合的な学習の時間」(Period for Integrated Study)が設けられた。その枠組みの中で、課題として国際理解を取り上げた場合、その一環として、各小学校で任意に英語教育を実施してもよいとされた。ただし、任意の教育というかなり曖昧な状況にあるので、現場での混乱は避けられないとみられ、多くの論議を呼んでいる。3) については、戦後最大の10年以上に及ぶ不況下で、外国企業による日本企業の吸収・合併が進む中、英語を社内の公用語とする企業が出現していること、さらに今まで大学教育については何も期待せず、入社後の社員教育を主眼としてきた企業が、即戦力を持った学生の雇用に切り替えているために、企業社会の中で、実用的な英語運用能力の需要が増大しているという状況がある。4) は、コンピューターが米国を中心に開発されてきたことから、そこで用いられる言語は英語であり、それを通じて提供される情報もかなりの比重で英語が使用されているということである。

以上、日本社会での英語の重要度は今までに類を見ないほど高まっているといえる。このような社会の変化を身近に感じていると思われる大学の新生が、どのような期待を持って大学の英語の授業に望むのか、ということは大変興味のあるところである。

加えて、少子化による大学生人口の減少が大学経営に及ぼす影響も見過ごせない。1992年から2000年の間に18歳の人口は半減し、この傾向はさらに加速すると見られている。このような状況下では、大学のカリキュラムに学生の意見を反映させ、より良い教育を目指すことは教える側にとっても不可避である。

### 2. 日本の学生の Motivation

調査に先立ち、新入生の英語学習に対する motivation について考察してみたい。

#### (1) 入試の影響

大学入試が、中学、高校での英語の授業のあり方に与える影響は大きい。特に高校の英語学習は大学入試に照準を合わせ、コミュニケーションの手段としての側面の学習はないがしろにされる傾向にある。このような日本の英語教育の実態を British Council はその報告書の中で以下のように述べている。

The examination is highly mechanical, requires ability in manipulating grammar rules and learning vocabulary, but makes little attempt to test use of the language. The washback effect on teaching at secondary level is destructive. Inevitably, teaching materials are geared to obtaining a good result in the university entrance examination, which reinforces traditional habits and discourages teachers from introducing more communicative activities (The British Council, 1997: 22).

高校生の英語学習の *motivation* が大学入試のためということであるなら、大学入学後の学生には *motivation* が欠落し、英語学習に対する興味も、積極的な取り組みも、授業に対する期待もないのは当然と考えられる。過去の多くの調査でもこのことは明らかにされている。

The students appear in freshmen classrooms as a kind of timid, exam-worn survivor with no apparent academic purpose at university (Berwic and Ross 1989: 193).

Once admitted into a university, students lose sight of their goals..... They endure English lessons only to accumulate enough credits to graduate (Matsumoto, 1994: 210).

## (2) 日本社会における EFL (English as a Foreign Language)

日本ではこれまで、英語は完全に EFL として捉えられ、実社会で英語が使用される ESL (English as a Second Language) の状況にはなかった。これが英語学習に不利な条件として常に指摘されている。Cogan 他による、米国と日本の学生の Motivation の比較調査においても、日本の大学生が英語を実用的な目的のためというよりは学科の一つとして学習していて、それほど重要視していないという結果が出ている。

Most of the Japanese tested do not believe that foreign language study is especially important for them personally... the Japanese regard foreign language study as an academic pursuit, rather than one to be valued for utilitarian purpose (Cogan, Torney-Purta, & Anderson, 1988: 295).

しかしながら、学習する言語の実用性が見えない場合、学生が興味を示さないのは日本に限ったことではなく、必修科目として、フランス語、スペイン語、ドイツ語のいずれかを学ばなければならない英国の中学 1 年生を対象とした調査でも、それらの言語を直接使用する場面が現実の社会にないことによる *motivation* の欠落が指摘されている。

What's the use? Many do not see their relevance of language to their everyday lives (Chambers, 1993: 13).

以上の通り、入試の反動、及び homogeneous、monolingual な社会に起因する大学生の英語学習に対する *motivation* の欠如、やる気のなさについてはこれまでの調査で証明され、定説化しているが、ここに来ての急激な globalization を中心とした日本社会の変化が

学生の英語学習に対する態度にどのような影響を及ぼしているかを調べることは、今後の英語教育の新しい方向付けをする上で重要なことであると考えられる。

### 3. Motivation のリサーチに対する新しい Approach

強い motivation が学生の学力不足、学習環境の不備などをも凌ぎ、学習を成功に導く最大の鍵であることは疑問の余地がない。

Without sufficient motivation, even individuals with the most remarkable abilities cannot accomplish long-term goals.....high motivation can make up for considerable deficiencies both in one's language aptitude and learning condition (Dörnyei, 1998: 117).

1990年に入り、外国語学習に対する motivation のリサーチに従来とは異なったアプローチが見られるようになった。この新しいアプローチは今後の日本の英語学習に大きな示唆を与えるものとして注目に値する。

Motivation に対するリサーチは 1970年代に Gardner を中心として、広範囲、長期に渡って行われ、その結果、Integrative motivation (a desire to be representative members of the other language community) と Instrumental motivation (a desire to gain social recognition or economic advantages through knowledge of a foreign language) の2種類の motivation が確認され、以後この2分化の概念が主流を占めることとなった。しかし、これらの調査はカナダを中心に2言語が共存する地域、すなわち学習対象となる言語及びその言語を話す社会が、学習者の社会の中に存在するという状況のもとで行われたため、日本をはじめ、そのような状況にない国々や地域での motivation のリサーチにこの概念を直接当てはめて分析することには無理があった。その不備を補う形で、1990年代に入り、motivation のリサーチは、どのような状況にも適応できる、より普遍的な構成要素を探る方向へと移行していった。Gardner の調査では、学習者とその対象言語を話す社会との関わりに焦点が当てられていたのに対し、この新しいアプローチは、今まで軽視されていた教育現場での様々な要素と学生の motivation の関係の重要性に焦点を当てていることが大きな特徴である。1970年代のアプローチを Socio-psychological Approach と考えると、1990年代のものは Educational Psychological Approach といえる。後者は Deci と Ryan (1985) の Self-determination Theory を基に Vallerand (1997) が発展させ、そのリサーチの結果、外国語学習では Intrinsic motivation (which deals with behaviour performed for its own sake in order to experience pleasure and satisfaction) と Extrinsic motivation (which involves performing a behaviour as means to received extrinsic reward) が確認された。

しかしながら言語学習は、他の学科の学習とは違い、対象言語の社会との関わりは無視できないので、異なったアプローチから認識された2種類のそれぞれ2分化された motivation は、決してお互いに排除し合うものではなく、補完的な関係にあると考えられる。この関係を次のように表にして明確にした。

[Table 1]

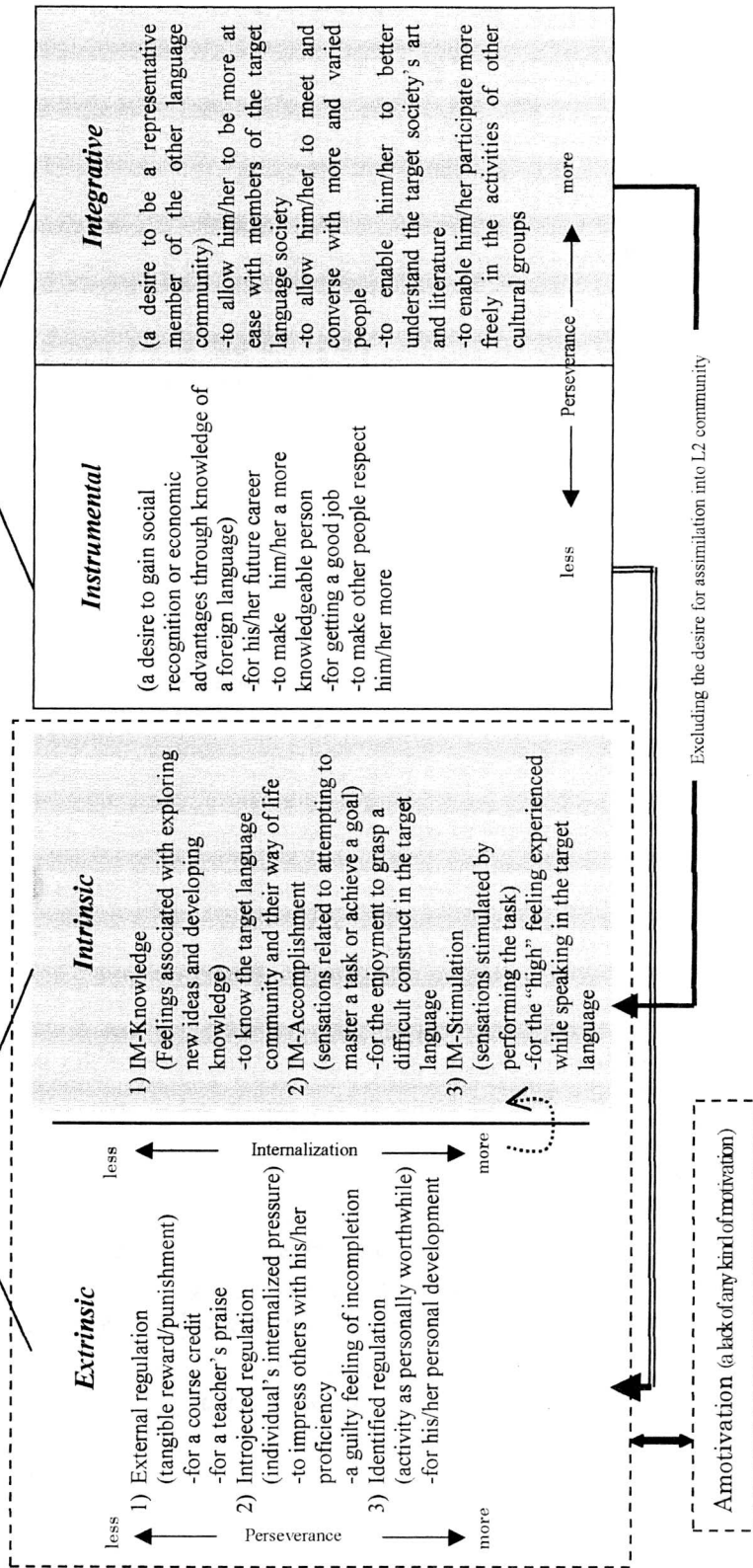
*Educational Psychological Approach*  
(self-determination theory)

**MOTIVATIONAL CONSTRUCT**

*Socio-psychological Approach*  
(Gardner's dichotomy)

General construct which has some relevance to language

Language-related construct



Dörnyei はさらに、自国ハンガリーで、全くの EFL の状況のもと Non-native English teacher として英語を教えた経験から、実際の教育現場が及ぼす Motivation への影響の大きさを認識した上で、これまでの Socio-psychological Approach、Educational Psychological Approach の両者から導き出された motivation の構成要素を総括し、発展させた。Dörnyei は、学習者の affective (情緒的) な側面、cognitive (知的作用的) な側面をも含め、実際の classroom situation を重視した体系を以下のように提示している。

[Table 2]

Components of Foreign Language Learning Motivation (Dörnyei, 1994)

LANGUAGE LEVEL	Integrative Motivational Subsystem Instrumental Motivational Subsystem
LEARNER LEVEL	Need for Achievement Self-Confidence *Language Use Anxiety *Perceived L2 Competence *Casual Attributions *Self-Efficacy
LEARNING SITUATION LEVEL	
<i>Course-Specific Motivational Components</i>	Interest Relevance Expectancy Satisfaction
<i>Teacher-Specific Motivational Components</i>	Afflictive Drive Authority Type Direct Socialization of Motivation *Modeling *Task Presentation *Feedback
<i>Group-Specific Motivational Components</i>	Goal-orientedness Norm & Reward System Group Cohesion Classroom Goal Structure

1970 年代の Gardner から最近の Dörnyei に至るリサーチの流れの中で、注目すべき点は、学生の Motivation の構成要素を考える際、従来は対象言語社会との関わりが重視されていたのに対し、近年は、教育の場が学習者に与える影響がより重視されるようになったことである。今回の調査もこの視点に立って実施された。

#### 4. 調査

##### (1) 仮説

冒頭述べたような学生を取り巻く状況の中で、大学受験を主な motivation としていた新入生がどのような期待を持って授業に臨むかを以下の 3 つの仮説に基づいて調査した。

仮説 1 : 学生の大多数は、大学の英語の授業を通じて、専門分野に役立つ高度な学問的英語力が身につくことを期待している。

仮説 2 : 学生の大多数は、大学の英語の授業を通じて、英語でコミュニケーションが図れるようになることを期待している。

仮説 3 : 単位習得のためだけに英語を学習する学生は僅かである。

## (2) 調査方法、調査対象

大学3校(A大学—45名、B大学—83名、C大学—83名)から合計221名の2001年度新入生に対し、Questionnaire(22 questions on a five-point Likert scale)を4月の最初の授業で実施。

## (3) Questionnaireの構成

—英語の授業環境に対する学生の期待: Q1, Q2, Q3, Q13, Q14

—英語の授業内容に対する学生の期待: Q4, Q5, Q6, Q7, Q8, Q9, Q10, Q11, Q12, Q17

—英語の授業に対する学生の学習者としての対応: Q15, Q16

—学外での英語学習に対する学生の取り組み: Q18, Q19, Q20, Q21, Q22

[Table 3]

非常にそう思う-5 そう思う-4 どちらでもない-3 あまりそう思わない-2 全然そう思わない-1

1. 英語力を付けるのに十分な授業数が与えられることを期待している。(1週間、何コマ—1コマ90分—が望ましいかも書いてください)	5	4	3	2	1
2. 英語の授業の1クラスの生徒数は中学、高校の時より少ないことを期待している。(何人が望ましいかも書いてください。)	5	4	3	2	1
3. 中学、高校の時より外国人教師の数が多いいことを期待している。	5	4	3	2	1
4. 英語の授業を受けて、自分の専攻の参考文献が英語で読めるようになることを期待している。	5	4	3	2	1
5. 英語の授業を受けて、自分の専攻のレポート、論文を英語で書けるようになることを期待している。	5	4	3	2	1
6. 英語の授業を受けて、自分の専攻の発表が英語でできるようになることを期待している。	5	4	3	2	1
7. 英語の授業を受けて、留学するのに十分な英語力が身につくことを期待している。	5	4	3	2	1
8. 英語の授業を受けて、十分なコミュニケーションが図れるようになることを期待している。	5	4	3	2	1
9. 英語の授業を受けて、英語の文法、構造などの知識がさらに深まることを期待している。	5	4	3	2	1
10. 英語の授業で、英語圏の人々、社会、文化について多くの情報が提供されることを期待している。	5	4	3	2	1
11. 英語の授業が私の視野を広げてくれることを期待している。	5	4	3	2	1
12. 英語の授業で、将来の仕事に十分な英語力が得られることを期待している。	5	4	3	2	1
13. 英語の教科書は注意深く選ばれていることを期待している。	5	4	3	2	1
14. 教師が情熱を持って教えることを期待している。	5	4	3	2	1
15. 英語の授業の予習、復習をするつもりである。	5	4	3	2	1
16. 英語の授業についていけるかどうか心配している。	5	4	3	2	1
17. 何も期待していない。ただ単位を取るために勉強するだけだから。	5	4	3	2	1

ほとんどいつも—5 よく—4 時々—3 たまに—2 全くない—1

18. 英語で書かれた新聞、本、雑誌などを読んでいる。	5	4	3	2	1
19. テレビで様々な英語の番組を見ている。	5	4	3	2	1
20. テレビやラジオの英会話の番組で英語を勉強している。	5	4	3	2	1
21. 外国人の友人と英語で会話をする機会がある。	5	4	3	2	1
22. 手紙、メモ、日記、レポートなどを英語で書いている。	5	4	3	2	1

#### (4) 調査の結果

##### ①英語の学習環境に対する学生の期待

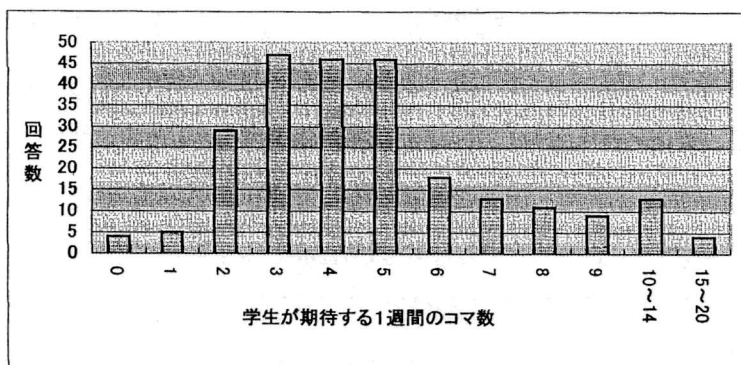
[Table4]

	5	4	3	2	1
Q1 授業数	22%	34%	31%	8%	5%
Q2 学生数	38%	25%	29%	4%	4%
Q3 外国人教師数	37%	28%	27%	4%	4%
Q13 教科書選択	27%	28%	37%	5%	3%
Q14 教師の情熱	45%	34%	17%	2%	2%

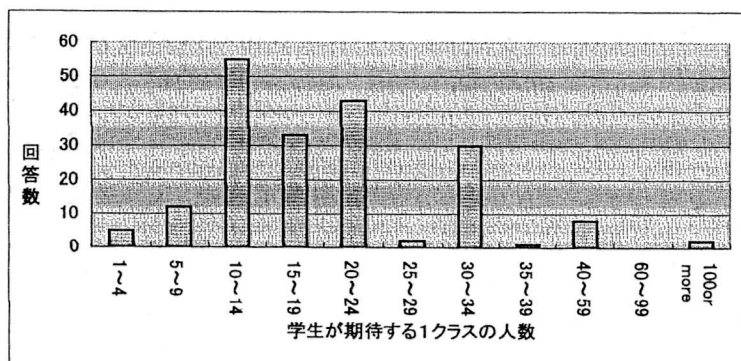
多くの学生が中学、高校より整った授業環境を期待していることが数値から読み取れるが、特に、教師に対する期待が突出 (rate5、4を合わせると79%) している点が注目される。

学生が期待する1週間のコマ数 (Q1)、1クラスの人気 (Q2) は以下の結果となった。

[Table5]



[Table6]



②専門分野に役立つ英語習得への期待

[Table7]

	5	4	3	2	1
Q4 専門文献読解力	34%	35%	19%	9%	3%
Q5 専門論文表現力	30%	31%	26%	9%	4%
Q6 専門発言力	32%	32%	22%	9%	5%
Q7 留学対応	33%	23%	23%	13%	8%
Q9 文法知識	23%	32%	24%	15%	6%

ここでの質問に対する答えは、平均で、「期待している」(rate5、4の合計)が61パーセントとなった。最も期待度が高かったのは、Q4の「専攻の参考文献が英語で読めるようになる」に対してであった。Q7の「留学するのに十分な英語力が身につく」に対する数値が他に比べると低いのは、入学直後の学生には留学がまだ現実的なものとして視野の中に入っていないということなどが考えられる。Q9の「英語の文法、構造などの知識がさらに深まる」に対する数値もあまり高くなく、これは入試の反動といえるかもしれない。

③コミュニケーションに必要な英語力習得への期待

[Table8]

	5	4	3	2	1
Q8 コミュニケーション力	57%	29%	5%	6%	3%
Q10 英語圏社会への理解	42%	38%	13%	5%	2%
Q11 視野拡大	53%	30%	12%	2%	3%
Q12 仕事に役立つ	50%	29%	14%	4%	3%

他の分野と比べると、ほぼ全質問で80%を越え、特に、Q8のコミュニケーションのための英語習得への期待は86% (rate5、4を合わせて) となり、今回のアンケートの中で最も高い数値となった。学生の英語でのコミュニケーションに対する強い要望が汲み取れる。

④単位習得のみが目的

[Table9]

	5	4	3	2	1
Q17 単位のため	2%	4%	16%	26%	52%

過去の日本の大学生を対象とした調査では、かなりの割合の大学生が単位習得のためのみとの調査結果が出ているが、今回の調査では驚くほど低い割合となり、学生の英語習得に対する態度の変化が確認された。



⑤授業に対する学生の対応

[Table10]

	5	4	3	2	1
Q15 予・復習の自覚	21%	43%	28%	5%	3%
Q16 自分の学力不安	42%	23%	18%	9%	8%

過半数以上（64%；rate5、4を合わせて）の学生が授業の予習、復習をすると答え、教育側に対する一方的な期待のみではなく、その期待を実現すべく自らも努力をするという姿勢が見て取れる。ただ、授業のレベルと自分の能力との差に対しての不安も、65%（rate5、4を合わせて）と高い数値となっている。

⑥授業に対する学生個々人の取り組み

[Table11]

	5	4	3	2	1
Q18 英語読書	4%	3%	13%	26%	54%
Q19 英語TV番組	3%	6%	10%	23%	58%
Q20 TV英会話学習	4%	3%	4%	15%	74%
Q21 友人との英会話	3%	5%	6%	7%	79%
Q22 日記などの英語記述	3%	1%	2%	9%	85%

大学の授業に対する期待が大きかったことに比べ、学生が学外で日常、英語習得のためにどのような努力をしているかについては、すべての質問に対して、努力をしているという答えが10%以下という低い数値となった。これは、彼らの周囲に英語の環境が乏しいという、日本の社会状況を反映していると考えられる。むしろこのことが、学生の大学に対する期待が大きき要因になっているともいえる。

以上、調査の結果、仮説2、3はそれぞれ立証するに十分な数値が得られた。仮説1については60%を超える数値ということで、立証するまでにはいたらなかったが、少なからぬ期待を持っていることは証明された。

5. 終わりに

今回の調査で、大学の授業には、やる気のない学生が単位習得のためのみに臨んでいるという、これまでの定説が覆された。これまで日本の学生については、大学入学以前は入学試験合格のための **strong motivation** を持つてはいるものの、その授業内容と授業の運営方法のために決して英語学習を楽しんでいない。それどころか英語嫌いになる傾向にある。すなわち英語に対して **negative attitudes** で臨んでいる場合が大半であるといわれていた。通常、**strong motivation** には **positive attitudes** が伴うという図式とは違い、**strong motivation** と **negative attitudes** の組み合わせが日本の学生に特有の英語学習に対する態度であると考えられてきた。このような理解の下では、入試後、**motivation** は消滅し、**negative attitudes** のみが残り、単位取得のためにやむなく授業に出席するという現象は当

然のことと考えられる。学生のやる気のなさに悩まされた教師の体験談も多い。しかし、今回の調査で、現在の学生の実態はこれまでの定説と随分違っていることが明らかとなった。現実には、入学直後、やる気のある学生が授業に期待を持って臨んでいるのである。その期待も、コミュニケーションのための英語能力を身に付けたいという具体的なものである。さらには、専門の勉強のために英語能力を伸ばしたいという希望もかなり見られる。

学生の期待に教師はどのように対処したらよいかという点については Powell and Taylor(1985)が3つの対処；1) Fight them, 2) Join them, and 3) Channel them、を提示している。Tarone and Yule(1995)は、この中で3) Channel them について以下のように説明し、最も適切な方法であると薦めている。

**This is a compromise position in which both teacher and student can fulfill their expectations of what counts as an effective learning experience (1995: 5).**

さらに、Berwick と Ross は 1989 年に日本の大学入学直後の学生の motivation の調査を行い、その結果、motivation の著しい欠如という結論を得た。しかし、同じ学生に対する 1 年後の調査で、多くの学生の中に、留学のために、或いは視野を広げるために、というような具体的な英語習得に対する目的が見られるようになったという結果を得たことから、学校、教師が学生に channel を合わせることで彼らの motivation に作用できるとの結論を導き出し、その重要性を説いている。

**There is much that universities can do channel the attention of their student in directions which motivate language learning (1989:208).**

教師、学生の双方の理解と協力のもとに、より効果的で、より良い授業を築き上げていくことが英語学習を成功に導く上で大切なことであるのは言うまでもない。Kenning は特に、教師が生徒の望んでいることを知る必要性を次のように述べている。

**Finding out what learners really want is all the more necessary as studies of teachers' and learners' views have highlighted the existence of divergences of opinion between the two groups, and a great deal of ignorance among teachers about what their students do and like (2001: 48).**

Motivation については過去多くの調査が行われているが、expectation についての調査はほとんど行われていない。教育現場でのあらゆる要素が学生の英語習得への motivation、attitudes に強い影響を及ぼし、その重要性が最近特に指摘されていることを考えると、学生が何を期待して授業に参加しているかを調べることは不可欠であり、教える側にとっては貴重な情報を得るための手段といえる。今後もさらに継続的な調査が望まれる。

### References

- Berwick, R and Ross, S. (1989). Motivation After Matriculation: Are Japanese Learners of English Still Alive After Exam Hell? *JALT Journal*, 11, 193-210.
- Chambers, G. (1993). Taking the 'de' out of demotivation. *Language Learning Journal*, 7,13-16.
- Cogan, J., Torney-Purta, J., & Anderson, D. (1988). Knowledge and attitudes toward global issues: Students in Japan and the United States. *Comparative Education Review*, 3, 289-297.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and Motivating in the Foreign Language Classroom. *The Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Dörnyei, Z. (1998). Motivation in second and foreign language learning. *Language Teaching*, 31,117-35.
- Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and Researching Motivation*. Essex: Pearson Education.
- Gardner, R. C. and Lambert, E. W. 1972. *Attitude and Motivation in Second-Language Learning*. Massachusetts: Newbury house Publisher.
- Kenning, M. (2001). Language learning interests at university. *Language Learning Journal*, Summer 2001, 23, 48-57.
- Matsumoto, K. (1994). English Instruction Problems in Japanese Schools and Higher Education. *Journal of Asian Pacific Communication*, 5, 209-214.
- Noels, K. A, Pelletier, L G. and Vallerand, R. J. (2000). Why Are You Learning a Second Language? *Language Learning* 50, 57-85.
- Noels, K. A., Clement, R. and Pelletier, L. (1999). Perceptions of Teachers' Communicative Style and Students' Intrinsic and Extrinsic Motivation. *The Modern Language Journal*, 83,23-34.
- Paul, D. (1998). False Assumptions in the Japanese Classroom. *The Language Teacher* 22:7, 27-28.
- Tarone, Y. and Yule, G. (1995). *Focus on the Language Learner*. Oxford: Oxford University Press.